様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 １４ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２００５２

研究課題名（和文）霊宝経を中心とする敦煌道教文献の研究

研究課題名（英文）Research on the Dunhuang Daoist Manuscripts mainly on Lingbao-jing

研究代表者
神塚　淑子（Kamitsuka, Yoshiko）

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：２０１２６０３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,500,000円、（間接経費）　750,000円

研究成果の概要（和文）：敦煌写本は、六朝時代から唐代初めの時期における道教経典の実態を知るための重要な資料である。本研究では、国立国会図書館や京都国立博物館など、日本国内に所蔵する敦煌写本について調査研究を行うとともに、中国の研究者を招いて名古屋大学でシンポジウムを開催した。また、霊宝経を中心とする敦煌写本の研究を通じて、道教と仏教の相互関係を考察した。

研究成果の概要（英文）：The Dunhuang manuscripts are the important documents to know the actual conditions of the Daoist scriptures in the Six Dynasties and early Tang period. I researched the Dunhuang Daoist manuscripts possessed in Japan, such as in National Diet Library and in Kyoto National Museum. And I invited a Chinese researcher and held a symposium on Dunhuang Daoist manuscripts at Nagoya University. In addition, I considered the interactions between Daoism and Buddhism through the research of Dunhuang manuscripts of Linbao scriptures.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学

キーワード：中国哲学　道教　霊宝経　敦煌写本

１．研究開始当初の背景

道教関係の敦煌写本の研究としては、1970年代に刊行された大淵忍爾氏の『敦煌道経目録編』『敦煌道経図録編』の二冊の大著がある。これは道蔵本と丁寧に対照した校記がつけられており、また、図録の写真も鮮明であって、今でも道教研究者にとっては必携の書である。その後、2004 年に中国社会科学院世界宗教研究所道教研究室主任の王卡氏による『敦煌道教文献研究――綜述・目録・索引』が出版された。これには図録はついていないが、大淵氏のものよりも 300 件ほど多い約 800 件の敦煌写本が網羅されており、スタイン文書やペリオ文書の中の小片のもの、あるいは中国国家図書館（北京）など中国国内に所蔵する敦煌写本など、近年、中国の研究者たちを中心として精力的に行われた調査研究によって明らかになった新しい情報が盛り込まれている。王卡氏の本書の刊行により、敦煌写本を用いた道教研究は、新たな段階に入ったと言ってよいだろう。

道教関係の敦煌写本と言ってもその幅は広いが、王卡氏はこれを三洞四輔の分類に従って大きく七つに分け、そのほかに「道教経目及類書」「道教相関文書」「其他」の三項目を置いている。王卡氏の著書の出版により、道教関係の敦煌写本の全体像がよく見渡せるようになった。その中で、科研費の交付を受けて本研究が行おうとするのは、王卡氏によって「洞玄霊宝部上」「洞玄霊宝部下」に分類された写本である。「洞玄霊宝部上」には陸修静の「霊宝経目」に名前が見えるいわゆる古霊宝経が主に収められ、「洞玄霊宝部下」にはそれ以後に作られた霊宝経類が収められている。

四世紀末以降、江南の地で作られ始めた古霊宝経は、仏教の思想や儀礼を積極的に吸収し、元始天尊を最高神とする神学大系を構築した。古霊宝経、および、その流れを受けて作られた霊宝経類の経典に記された思想や儀礼は、隋唐時代以後、長く中国道教の実質的な中心であった。古霊宝経の成立と思想については、すでに、大淵忍爾氏、小林正美氏、S・ボーケンカンプ氏、王承文氏らによる研究があり、また、古霊宝経・霊宝経類の道蔵本と敦煌写本との比較研究としては、大淵忍爾氏、石井昌子氏、前田繁樹氏らによる研究がある。道蔵本に比べて敦煌写本は古い形を留めていることが多く、各経典の成立から比較的近い時代の姿を知るためには、敦煌写本の綿密な研究が必要である。

敦煌写本を用いた道教研究が新たな段階に入った今日、これまで紹介されていなかった写本について綿密な検討を行うとともに、以前から紹介されていた写本についても、近年の六朝隋唐道教研究の成果をふまえ、仏教・儒教を含む中国宗教思想史の広い視点から再検討を加えることが求められている。

２．研究の目的

本研究は、道教関係の敦煌写本のうち、特に、陸修静の「霊宝経目」に名前が見えるいわゆる古霊宝経に属するものと、古霊宝経の流れを受けて、それよりも後に作られた霊宝経類の写本を中心に取り上げて検討し、敦煌写本が書かれた六朝隋唐時代におけるこれらの道経の実際の状況を検討し、敦煌写本によって知りうる霊宝経典群の特質とその中国宗教思想史上の位置づけを明らかにすることを目的とする。

また、王卡氏『敦煌道教文献研究――綜述・目録・索引』においてもまだ収められていない、もしくは、その存在は知られているが、まだ実質的な説明がなされていない敦煌写本もいくつかある。それらのうち、日本国内に所蔵するものについて、所蔵機関と連絡を取って可能な限り実地調査を行い、論文等で紹介し、道教関係の敦煌写本についての全面的な把握を行うことにもつとめたい。

３．研究の方法

(1) 王卡氏『敦煌道教文献研究――綜述・目録・索引』の「洞玄霊宝部上」には、大淵忍爾氏の『敦煌道経目録編』では挙げられていなかった古霊宝経の写本が 20 点余り紹介されている。それは中国国家図書館（北京）に所蔵するものや、ロシア科学院東方研究所に所蔵するものが多いのであるが、それらの写真を入手して、道蔵本との比較検討を行う。また、大淵氏によってすでに紹介されていた写本についても、あらためて道蔵本との比較を行う。一般に、敦煌写本は道蔵本に比べて仏教語が中国的・道教的な語彙に変えられずに、そのまま使用されているケースが多いことがこれまでの研究で指摘されているが、新たに紹介された写本等についてはどうであるのかを確認する。

(2) 古霊宝経の流れを受けて作られた霊宝経類に属する敦煌写本の中から、『太上霊宝洗浴身心経』を取り上げて考察する。『太上霊宝洗浴身心経』は、唐代初期の仏教・道教間の論争が盛んであった時期に、仏典『温室経』に対抗して道士李栄によって作成されたとされる経典であるが、道蔵本には収められず、敦煌写本だけに残っているものである。唐代初期における仏・道二教間の相互交渉を見る上で重要な経典であり、道教研究において、敦煌写本研究の占める大きな意義を知らせてくれる一つの好例である。

(3) 日本国内に所蔵する道教関係の写本でまだほとんど紹介・研究されていないものがいくつかある。それらについて閲覧調査を行い、その結果を論文や口頭発表によって公表

する。

(4) 王卡氏を名古屋大学に招聘して日本の道教研究者たちと敦煌写本に関するシンポジウムを開催する。

４．研究成果

(1) 古霊宝経について、敦煌写本と道蔵本との比較検討を行った。従来から知られていた敦煌写本については、すでに大淵忍爾氏、石井昌子氏、前田繁樹氏らによる研究があり、敦煌写本は道蔵本に比べて仏教語が中国的・道教的な語彙に変えられずに、そのまま使用されているケースが多いことが指摘されている。それは、『自然真一五称符上経』『法輪妙経』『真一自然妙訣』『智慧本願大戒上品経』などに特に顕著に見られるのであるが、その実態について再確認した。一方、王卡氏『敦煌道教文献研究――綜述・目録・索引』の「洞玄霊宝部上」で新たに紹介された 20 点余りの写本ではどうであるか、実際にそれらについて、道蔵本との比較を行った。その結果、新たに紹介されたものは比較的小さな断片の写本が多いことなども関連しているのか、仏教語の改変状況という視点からは、特に注目すべき事例はほとんど見出すことができなかった。しかし、新たに紹介された写本について道蔵本との照合結果を記しておくのは必要であると思われるので、それを記した小冊子を作成した。

(2) 敦煌写本『太上霊宝洗浴身心経』（スタイン 3380、ペリオ 2402、北京図書館蔵本 14523.2）について研究を行った。敦煌写本『太上霊宝洗浴身心経』については、すでに大淵忍爾氏の『敦煌道経目録編』『敦煌道経図録編』において紹介がなされ、陳祖龍氏「看了＜報恩寺開温室洗僧記＞以後」や程存潔氏「敦煌本《太上霊宝洗浴身心経》」などの論文が発表されている。それらの先行研究の成果をふまえつつ、仏典『温室経』に対抗して道士李栄によって作成されたとされる『洗浴経』（すなわち『太上霊宝洗浴身心経』）の内容を、六朝から唐代初めにかけて成立した他の道教諸文献の記述との関連において詳細に検討した。その結果、『洗浴経』は『温室経』を意識しながら書かれたとはいえ、説かれていることの重点は異なっており、『温室経』では温室（浴室）で衆僧に対して洗浴のための道具を供養することの功徳に重点が置かれているのに対して、『洗浴経』では修行者が身心の穢れを「道性の水」で洗い落として本来の清浄なる状態に復帰すべきであることを説くことに重点が置かれており、復帰するための方法として説かれた事柄は、『無上秘要』などの道教文献に見える記述と重なる点が多いことが明らかになった。以上のような事柄について、東アジア仏教研究会第 11 回年次大会（2012 年 12 月 1 日、駒澤大学）において、「「仏典『温室経』と道典『洗浴経』」と題して口頭発表を行い、のちに、同じタイトルで論文にまとめた（『名古屋大学文学部研究論集』哲学 60、2014 年）。

(3) 日本国内に所蔵する道教関係写本の調査として、国立国会図書館（東京）、京都国立博物館、龍谷大学図書館が所蔵する敦煌・トルファン写本の閲覧調査を行った。これは、2012 年 3 月、本科研費によって日本に招聘した王卡氏とともに行った。その結果、次のような成果が得られた。

① 国立国会図書館（東京）には、道教関係の敦煌写本を 2 点所蔵している。『国立国会図書館漢籍目録』に、「金録晨夜十方懺残巻」（WB32-1(3)）と「道教叢書残巻」（WB32-1(30)）と記されているものである。このうちの前者については、すでに、王卡氏『敦煌道教文献研究――綜述・目録・索引』に紹介され、『中華道蔵』（第 43 冊 001 号）にも収録されているが、後者はこれまでその内容について紹介されたことがなかった。この写本 WB32-1(30)を閲覧した王卡氏は、ただちに、これは敦煌写本ペリオ 2443 と同一書物を書写したものであろうと指摘された。王卡氏の指摘を受け、それを検証するために写本 WB32-1(30)の内容を詳細に考察した。その結果、写本 WB32-1(30)は、その内容から見て道教の類書であるが、項目の立て方は、『無上秘要』や『三洞珠嚢』などのような道教独自の世界観・教理体系に基づく編成ではなく、『芸文類聚』や『太平御覧』などと同じく一般の類書の体裁で編纂されている珍しいものであること、そこに引用された延べ 34 件の道経の内訳は、上清経が 8 件、古霊宝経が 10 件、太平経が 4 件、老子西昇経が 3 件、老子歴蔵中経と老子道徳経が各 2 件、霊宝衆篇序経・仙公内伝・本行経・昇玄経・三皇経が各 1 件であることなどが明らかになった。この WB32-1(30)をペリオ 2443 と比べてみると、類書としての構成が同じであること、引用された道経が同じ傾向を有するものであることから考えて、王卡氏の指摘のとおり、両者は同一の書物からの書写である可能性が高く、さらに、両者の文字と紙質、および紙背に書かれている事柄の共通性から見て、もともと同一の巻子であったものが二つに分かれたものである可能性も考えられる。WB32-1(30)に書写されたものは、道蔵に収める『道要霊祇神鬼品経』との比較から見て、『道要』という名の類書の一部であった可能性があり、六朝隋唐時代の道教類書の状況を知る上で貴重な資料であると言える。以上のような事柄を、「国立国会図書館所蔵の敦煌道教写本」と題する論文にまとめた（『名古屋大学文学部研究論集』哲学 59、2013 年）。

② 京都国立博物館にも道教関係の敦煌写本

が 2 点所蔵されている。『守屋孝蔵氏蒐集古経図録』に記載されている「太上業報因縁経巻第八」（重文。京都 252）と「太上洞玄霊宝妙経衆篇序章」（京都 253）がそれである。この 2 点は、大淵忍爾氏の『敦煌道経目録編』『敦煌道経図録編』にも収録されているが、京都 253 については、6 メートル以上に及ぶ巻子の末尾部分の写真しか掲載されておらず、詳しいことはよくわからなかった。そこで、今回、許可を得て写真撮影を行い、巻子全体についての詳しい調査を行った。「太上洞玄霊宝妙経衆篇序章」は、「霊宝中盟経目」（『三洞奉道科戒営始』巻四）に見える「衆経序」に相当すると考えられるものであるが、道蔵には収められていない。しかし、敦煌写本では、京都 253 の他に 3 点（スタイン 6659、スタイン 5733、ペリオ 2386）残っており、その内容は、三種の古霊宝経（『元始五老赤書玉篇真文天書経』『太上洞玄霊宝三元品戒功徳軽重経』『太上霊宝諸天内音自然玉字』）を抜粋したものである。京都 253 の写本の巻末には、南朝梁の承聖三年の奥付がある。しかし、この写本については早くから偽造説が出されており（藤枝晃氏「「徳化李氏凡将閣珍蔵」印について」、『学叢』第 7 号、1985 年）、写本としての真偽のほどは定かではない。しかし、「太上洞玄霊宝妙経衆篇序章」は道蔵には収められず敦煌写本でのみ知りうるものであり、他の 3 点の写本と合わせてその内容を見てみると、これは、六朝道教における「経」と「序」の関係について考える上で、一つの示唆を与えてくれる資料である。つまり、六朝道教の経典のうち、その中核をなす部分（これをここでは「経」と呼ぶ）は元来、秘伝的要素の強いものであり、古霊宝経には、その「経」の由来について物語的要素を加えつつ説明した文章が「序」として附されていたが、六朝末のある段階において、古霊宝経のうち重要な三種の「序」の部分だけが抜粋されて編纂されたものが「太上洞玄霊宝妙経衆篇序章」であったと考えられるのである。以上のような事柄について、「京都国立博物館所蔵敦煌道経小考」と題して、六朝学術学会第 27 回例会（2013 年 12 月 7 日、愛知大学）において口頭発表を行った。

③ 日本国内にまとまった規模で所蔵する敦煌写本としては、杏雨書屋所蔵のものがある。これについては、2009 年から『敦煌秘笈』影片冊の公刊が始まり、2013 年までに 9 冊の影片冊が刊行された。この中には、二十数点の道教関係の写本が含まれている。これらについても詳細な調査研究を行いたかったが、今回は残念ながらそこまで及ぶことができなかった。今後の課題としたい。

(4) 王卡氏を日本に招聘し、2012 年 3 月 25 日に名古屋大学文学部において、「敦煌道教文献シンポジウム」を開催した。そのプログラムは次のとおりである。

王卡（中国社会科学院世界宗教研究所）
「王玄覧著作的一点考察」
　司会・コメント　山田俊（熊本県立大）
菊地章太（東洋大学）
「『道要霊祇神鬼品経』の書写と劾鬼法の普及」
　司会・コメント　神塚淑子（名古屋大）
山田俊（熊本県立大）
「敦煌本『太上妙法本相経』」
　司会・コメント　麥谷邦夫（京都大）

シンポジウムに当たっては、予稿集を準備した。小規模のシンポジウムではあったが、新たな資料の紹介や、活発な質疑応答があり、意義深いものとなった。このシンポジウムの様子については、日本道教学会の『東方宗教』第 120 号（2012 年 11 月）の「国際学界動向」の欄に、山田俊氏による報告文が書かれている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 神塚淑子
「仏典『温室経』と道典『洗浴経』」、『名古屋大学文学部研究論集』哲学 60、　査読無、2014 年、pp. 57～83。
名古屋大学学術機関リポジトリ (ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/handle/2237/19779)

② 神塚淑子
「国立国会図書館所蔵の敦煌道教写本」、『名古屋大学文学部研究論集』哲学 59、　査読無、2013 年、pp. 59～88
名古屋大学学術機関リポジトリ (ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/handle/2237/17718)

〔学会発表〕（計３件）

① 神塚淑子
「京都国立博物館所蔵敦煌道経小考」、六朝学術学会第 27 回例会、2013 年 12 月 7 日、愛知大学（名古屋）

② 神塚淑子
「司馬承禎与天台山」、中・日・韓宗教学術論壇――道教与中国文化、2012 年 12 月 14 日、泉州（中国）

③ 神塚淑子
「「仏典『温室経』と道典『洗浴経』」、東アジア仏教研究会第 11 回年次大会、2012 年 12 月 1 日、駒澤大学（東京）

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
神塚　淑子（KAMITSUKA Yoshiko）
名古屋大学・文学研究科・教授
研究者番号：20126030

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：